水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水を支える二つの力

岡山県　岡山市立吉備中学校　二年　稲田　知陽

「お小遣いを貯めて買いたいもの。」といえば、何が思い浮かぶだろうか。はやりの洋服、お気に入りの文房具。どれもすてきだが、私が今欲しいものは「雨水タンク」である。

私が雨水タンクに注目するようになったのには理由がある。それは、私達の生活になくてはならないものである「水」が、二つの力によって支えられ、私達の元に届けられていることに気づいたからである。

一つ目の力は、いわばハード面の支えだ。システムとして私達に水を届けてくれる「水道」である。私達の体は約六十パーセントが水でできている。だから、私達にきれいで新鮮な水を運んできてくれる水道は、文字通り命綱のような存在だ。世界では、まだまだ水を手に入れるのに、私達には想像もつかないほどの労力を必要とする地域もある。それに引きかえ、日本では蛇口をひねるだけで、飲める水が手に入る。信じられないほど恵まれた環境である。水道料金に対し、「高い」と感じる人もいるかもしれない。だが、私はこのすぐれたシステムの対価としては驚くほど安いと思う。憧れる外国人が多いというのも、とてもよく分かる。

しかし、この水道も初めから私達の生活の中にあったわけではない。私の住んでいる岡山市に水道が誕生したのは、明治三十八年七月だった。なんと全国で八番目の早さだったそうだ。市の中心街にある京橋に沿って架けられた「水管橋」は、登録有形文化財として、現存する全国で唯一の水道管専用橋として私達を毎日見守ってくれている。昔も今も、私達の生活における水の恵みの大きさを京橋を通るたびに実感する。

先日、久しぶりに浄水場に併設された「岡山市水道記念館」を訪れた。特に興味深かったのは、「緑のダム」として、降った雨水の五十パーセントを蓄える森林を水道局の職員が管理しているということだ。まさに源から水の面倒を見てくれていると知り、感激した。

水を支える二つ目の力は、ソフト面、つまり公的機関ではなく、私達一人一人の努力である。大切な水をどのように受け取り、使い、自然の元へ返すか。その姿勢を見直したい。

私の父方の祖父母は、赤磐市で農業をしている。自然豊かな山の中で、私もタケノコを採ったり、ワラビを摘んだりと、町ではできない体験をさせてもらっている。その祖父母の農業を支えるのが、地元の池だ。「上の池」と呼ばれる大きな溜め池の守りを、集落で協力して行っている。先日、遊びに行ったとき、ちょうど、祖父母は溝掃除をしていた。田植えまでに、池から用水路を通って水が田に流れ込めるように、草を刈ったり土を上げたりしなければならないそうだ。早朝から昼過ぎまで休みなく働く祖父母の姿を見て、私は改めて、当たり前のように水を使うのではなく、自分から動いて、水と関わっていくことの大切さを感じた。

ならば、私には何ができるだろうか。私は、水の無駄使いを減らすことが第一歩と考えた。水道記念館で学習したが、一日の生活の中で最もたくさんの水を使うのは、トイレだそうだ。恥ずかしいからといって、トイレの水を使い過ぎるのは、私達の自意識過剰かもしれない。本当のマナーとは何かを仲間で話し合ってみたい。

そう思っていた矢先、新聞記事で、岡山市が雨水タンクの助成金制度を設立したことを知った。雨水タンクは、主に洪水の抑止のために設置されるらしいが、庭の水やりや災害時の代替水源としても活用できるし、トイレの流し水にも使える。雨水を自然に土にしみ込ませることで、地下水の量も増やすことができる。まさに、自然から水を受け取り、自然に返すやり方が実現できるのだ。

水を支える力に私はなりたい。そのためにも、自分で雨水タンクを購入したいと思う。